

2017 年 10 月 22 日（日）「隠された宝の価値」

マタイ 13:44-46

44 天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。

45 また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。46 すばらしい値うちの真珠の一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。

【序論】

今日は「価値」の問題を扱います。私たちが日頃あまり深く考えることなく使っている言葉ではありますが、経済学の分野では難解な議論が交わされてきました。物事の価値をどう定めるかにおいて、大きく二つの説が存在するようです。ざっくりとではありますが見ておきたいと思います（参照：Wikipedia「価値」項）。

①効用価値説

欲求の充足という消費面からのアプローチ。価値の根源を人間の欲求に求める説。欲求は主観的なものであり、異なる個人間での比較のための絶対的尺度とはなり得ない。つまり、価値そのものは商品には属さず、人間の欲求の度合いによって決まるという考え方。

②労働価値説

（労働量という）生産面からのアプローチ。人間の労働が価値を生み、その労働が商品の価値を決めるという説。つまり、労働量が多いほど価値量も所得も多くなるという考え方。

「価値のパラドックス」という問題もあります。例として、「水は有用だが通常は安価であり、宝石は有用とはいえないが、非常に高価である」。この問題を解決するために、「交換価値」と「使用価値」をはっきりと区別し、直接の関連を否定して考えるようになりました。水は使用価値は高いが、交換価値（価格）は低い。また、宝石は使用価値は低いが、交換価値（価格）は高い。

以上のようなことを学びながら、「天の御国の価値」とはどのように判断されるのかということを考えていました。「天の御国」という、この非物質的なものの価値を私たちは認め、信者となった訳ですが、私たちが何を認めた（認めている）のかということ問い直す機会になればと願います。価値がなければ信仰するということもないでしょう。また、このために自分の生活の一部（あるいは全体）をささげる意味もありません。

【本論】

今日は二つの譬話をまとめて学びます。第一が「畑に隠された宝の譬」、第二が「最上の真珠の譬」です。いずれの譬話にも「天の御国は如何なる犠牲を払っても手に入れるべき価値がある」というポイントが存在します。しかし、両者の内容には細かい違いもありますので、注意深く読み取っていきたいと思います。

本論 1. 畑に隠された宝の譬

天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。(13:44)

まずは「畑に隠された宝の譬」です。ここで前提とされているのは、比較的貧しい日雇い労働者が雇い人によって派遣され、ある畑で作業をしているような状況でしょう。彼は野良仕事していたのか、作業中に何か手に違和感を感じ、掘り起こしてみる。すると、それは非常に高価な宝物だったということです。

主イエスの時代のユダヤ社会においては、まだ銀行が十分に備わっていなかったため、宝を地に隠す習慣がありました。もちろん、銀行家がいなかった訳ではありません(25:27)。どういう時に宝を埋めたかという点、頻発する戦争の際に、敵軍の兵士による略奪からそれらの品を守るため、そのようにしたのです。あるいは、泥棒や強奪者の急襲に備える意味もありました。余談ですが、私も子どもの頃、石と石の間に五円札が挟まっているのを見つけたことがあります。しかし、せっかく宝物を地に埋めても、持ち主が何らかの事情で死んでしまい、宝は地中に埋もれたままであるということもあった。今日のストーリーは、そのようにして残された宝が発見された状況を指しているのでしょう。

さて、発見した日雇い労働者は心臓がドキドキし、キョロキョロと辺りを見回し、頭の中で考えました。これを主人に届けるべきか、黙って持ち帰るべきか、それとも見なかったことにするか。もし主人の許に持ち帰り、「これを見つけました」と言った場合、その発見者がたとえ使用人であったとしても、派遣主である主人(畑の所有者)のものになります。また、黙って持ち帰れば泥棒行為に当たるでしょう。そこで彼が選択したのは、最も安全かつ法的にも問題のない方法でした。それは、その畑を買い上げ、宝もろとも自分のものにしてしまうということです。彼はそのために自分の持ち物すべてを売り払って、それにもまさる財産を手に入れました。

さて、ややアレゴリカル(寓喩的)な解釈になるかも知れませんが、「畑」を私たち

の人生、「宝」を「救い」「永遠の命」「神の国」（すべて同義）と捉えるならば、この人生のどこかに埋まっている神の救いの価値を発見した時に、人は躍り上ってそれに飛びつくということと比較できるでしょう。「救い」は神から無償で与えられる恵みであるため、経済的価値基準で測れるものではありません。人と人との関係においても、罪の赦しが金で買えないことは誰もが知っているはずです。神との関係においては尚更です。私たちが何をもってしても交換条件とすることができないだけに、その価値は測りにくく、認めにくいものなのです。この価値は永遠という次元で捉えられなければならない。敢えて言うならば、神の子として永遠に受け続ける特権の数々は、地上の小さな持ち物と比較することができるのかも知れません。地上のものは朽ちゆく。しかし、永遠に属するものはいつまでも続きます。

本論 2. 最上の真珠の譬

また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。すばらしい値うちの真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。（13:45-46）

「最上の真珠の譬」は、「畑に隠された宝の譬」と双子のような関係にあります。しかし、微妙なニュアンスの違いがある。まず、ここでの中心人物が「商人」であるということです。実質的には「貿易商」であり、海外との取引に従事している人を指します。日雇い労働者と較べるとずっと裕福な身分であることが想像できるでしょう。彼が収集しているものは（交換価値の高い）宝石です。古代ユダヤ社会においては、真珠は金にまさって高価なものでした。真珠の収集家は、地元では良い真珠が取れないので、紅海の島々、遠くはインドやインドシナの島々まではるばる出向いたと言います。彼は最上の真珠を探し求め、ついに目当てのものをを見つけました。そして、彼は財産をはたいてそれを手に入れるのです。このところには、貿易商人特有の大胆さと言ったらよいのでしょうか、一面ギャンブルのようにたった一個の真珠に人生を賭けてしまう、リスクを顧みない行動が見られます。彼の目的はその真珠を所有すること自体にあるのです。この点でも、先の譬での畑を手に入れた人とは異なります。畑は購入すれば、自分で耕作して更に利益を得ることができる。しかし、真珠一個というのは、それを持っているからといって生活が潤うというものではありません。

このように見ていきますときに、「最上の真珠の譬」は「畑に隠された宝の譬」にもまさって、天の御国の価値を認める内容であることが分かります。天の御国は所有しているだけでも非常に価値がある。言い換えれば、主イエスと共にあるということがその人にとっての喜びなのです。

本論 3. イエスの命の価値を知れ

ここまで、二つの譬話を通して「天の御国の価値」について語ってまいりました。最後に、神の視点でこの「価値」について考えてみましょう。旧約聖書の早い段階から使われている「贖い」という言葉は、元々商取引の用語でしたが、やがて宗教的な意味が加えられ、捕われの状態にある人を身代金を支払って買い取るというニュアンスで使われるようになりました。奴隷を身受けする場合、相応の金額を支払ったのです。ここには、売主と買主の両方の利害が一致する金額が定められます。

神が私たちが罪の奴隷状態から贖うために支払った代価は御子イエスの命でした。このことの内には、神が私たちの価値をそれほどに認めて下さっているということが現れているでしょう。よく引用されるイザヤ 43:4 の聖句、「**わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している**」は、(文脈で読む必要がありますが) 神が御子の命を犠牲にして贖って下さったところにこそ、その真価が証しされるのです。神のイスラエルへの愛は、御子の血の契約によって現される。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ 3:16)

私たちは父なる神様にとって、御子イエスの命と交換するほどに大切な存在であると見られているのです。そして、主イエスご自身にとっては、ご自分の命と引き換えにするほど、まさしく死ぬほどに私たちが大切だということになる。この投げ出された命を安く見積もってはなりません。神の愛が最大限に凝縮された命。畑の中の宝も、高価な真珠も、いずれも主イエスの命そのものを表していると言ってもよいでしょう。

私たちが今信じているのは、この命の価値を見出したからなのではありませんか。聖書の御言葉は、誰もが耳にする機会を得ますが、その真の意味を悟ることのできる人は稀です。まるで、いつも眺めている何の変哲もない畑の中に、宝が埋蔵されているのを発見するようなもの。また、いつも眺めている大海原の先に、キラリと煌めく真珠を見つけ出すようなものです。いずれも、御言葉の内に描かれている神の愛、即ち、自分が神にどれほど愛されている存在であるのかを知る喜びこそ、この譬の意図しているところなのです。救いを求めて様々な宗教を渡り歩く人々(真珠を探して彷徨う商人と似ている)に、聖書のメッセージを伝えなくてはなりません。

【結論】

今日は「天の御国の価値」について学びました。また、これを通して、神の視点で見

た私たちの価値（主イエスの命に置き換えられた価値）というものを捉え直す時となりました。聖書の中にこそ、人間の真のアイデンティティを見出す道があります。そして、永遠の命と、神の子として無限に受け続ける特権の約束があります。どうか、この御言葉に目が開かれ、かけがえのない宝を自分のものとすることができますように。

【祈り】

宇宙のゴミのような存在である私たちに、とてつもない価値を見出して下さっている天の父なる神様。御子イエスの命と引き換えに、私たちを生かそうとして下さった御旨を知ります。あなたの愛を知るということはまさに、畑に隠された宝、最上の真珠を発見するようなものです。聖書はぼんやりと読んでいても、この真理に気づくことができません。どうか私たちの霊の眼を開き、あなたの慈しみをしかと受け取らせて下さい。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

かけがえのない御子の命を与えるほどに、我らを愛し給う、父なる神の愛。

地上の宝にまさる、永遠の御国の宝に、眼を開かせ給いし、主イエス・キリストの恵み。

聖書の言葉に隠された神の愛の巨大な価値を受け留めさせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。